

平成 31 年度

(令和元年度)

事業報告

内容

<事業の概要>

<分野別報告>

・運営管理

・保育内容

社会福祉法人省我会
千代田せいが保育園

<事業の概要>

○ 平成31年度（令和元年度）の事業の概要は以下の通り。

【児童待遇】

(1) 通常保育（産休明け56日目～就学前乳幼児）

(ア) 開園日数 293日 時間 午前7時30分～午後6時30分（11時間）

(イ) のべ入所児童数 502人（月人）

(ウ) 定員51名（4月43名）年度途中の入園児0名・退園3名 年度末40名

① 0歳 乳児保育 定員6名 年度末6名 のべ72名

② 年度末退園 4歳児1名（要保護家庭）

月	4	5	6	7	8	9	10	12	1	2	3	合計
0	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	72
1	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	82
2	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	108
3	11	11	11	11	11	11	11	11	11	10	10	130
4	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	108
5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	43	43	42	42	42	42	42	42	42	40	40	502

(エ) 緊急一時保育

① 夏に出産に伴う入園。2歳児クラスと3歳児クラスで1名ずつ受け入れ。

中村麟太郎（2歳児 8月19日～9月17日）

小林晴（3歳児 8月1日～10月12日）

② 千代田区から川合美津子保育士（研修担当）が保育補助に入る

月	4	5	6	7	8	9	10	12	1	2	3	合計
2 中村	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
3 小林	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	3
合計	0	0	0	0	2	2	1	0	0	0	0	5

(2) 延長保育（別紙参照）

(ア) 午後6時30分～午後8時30分（2時間延長）月～土曜日

(イ) のべ利用児童数 532人（6時31分以降）

(ウ) 0歳児 延長保育利用者 のべ22人

(3) 障がい児保育

(ア) 障害児等保育助成費 対象児童2名（3歳・4歳児）

- (イ) 園医による発達相談（7月17日～）
- (ウ) 千代田区の養育支援センター「さくらキッズ」による巡回指導（7月17日他）

(4) 健康管理

- (ア) 看護師配置 正規職員1名
- (イ) 嘴託医
 - 小児科（瀬川記念小児神経学クリニック・野崎真紀医師）
 - 歯科（山本歯科・山本雅道歯科医）

(5) 栄養管理

- (ア) 職員配置 栄養士2名
- (イ) 食育（別紙参照）
- (ウ) 食物アレルギー対応 毎月3名（のべ36名）

(6) 安全管理

- (ア) 自衛消防訓練（毎月） 引き取り訓練（年1回） 総合防災訓練（年1回）
（別紙参照）

(7) 要保護児童家庭

- (ア) 年度当初4名（3家族）～年度末1名（1家族）
- (イ) 千代田区主催の要保護児童家庭協議会に2回参加

(8) 苦情解決制度

保護者1名から2件の苦情あり ホームページで公表

【職員待遇】

- (1) 職務
法令および就業規則、職員心得等を踏まえ、担任表 園務分担 行事分担 行事分担等に従って職務を遂行した。
- (2) 処遇改善
千代田区の処遇改善 国の処遇改善Ⅰ、Ⅱ及び都キャリアアップ補助を支給した
- (3) 健康管理
 - ① 職員健康診断 10月1日（常勤15名）
 - ② 腸内検査 毎月（全職員）
- (4) 職員会議
 - ① 職員会議 および 保育会議 年12回
 - ② 朝会 毎日（月～金）

③ 食育会議 離乳食会議 行事会議 クラス別会議

(5) 研修 初年度につき OJT 中心

　　園内研修 出張研修 保育団体主催研修 (別紙参照)

(6) 入職・退職

(ア) 開園初年度：保育士 10 名 (法人内異動 7 名 外部 1 名 新卒 2 名)

　　看護師 1 名 栄養士 2 名 (うち法人内異動 1 名) 事務長 1 名

(イ) 退職： なし

<分野別報告>

【運営管理】

社会福祉法人省我会の4つ目の認可保育園として平成31年4月1日に開園した。3月19日に千代田区教育委員会教育長ならびに同区議会議長を招いた竣工式を開催後、新しい元号である令和が発表された4月1日に入園セレモニーを開いて保育がスタートした。

定員51名に対して、開園初年度は年長児が1名のみの入園（父親の海外からの帰国手続きが間に合わず一度も登園することなく5月末で退園）で、3月に千代田区から3姉弟の家庭が急遽入園が決定したため、2歳3歳クラスが1名ずつ定員よりも多くなり、都合43名となった。開園時間は午前7時30分から午後6時30分の11時間で、登園は午後8時半ごろまでに集中している。延長保育の利用は少なく、午後2時間の利用はなかった。夕食の提供は概ね2名の日が多くかった。

【園児と家庭の特徴】

園児のうち3家庭、4名が要保護児童家庭で開園前の2月15日に八王子市児童家庭支援センター（児家セン）で打ち合わせ。その中には児童虐待履歴のある家庭や、両親とも精神障害の方で送り迎えを外部のNPOに委託しているケースもある。これらの家庭とは、児家センと連携し、毎日の登園状況を記録して毎月提供してきた。当初の3家庭から、最終的には1家庭との支援で落ち着いた。その家庭は転園を繰り返しており、結局年度末には自宅の近くへ転園した。また逆に年度の途中から児童虐待の懸念から児家センとの連携が必要となった家庭もあった。

子どもは気になる子が多かった。千代田区医師会の紹介で決まった園医は「瀬川記念小児神経学クリニック」（理事長は星野恭子医師）で、その原因是発達障害、保護者の養育の影響そして子どもの睡眠リズムの乱れの3要素であろうという判断になった。ここに一年目の保育課題がはっきりと浮上した。家庭の養育態度の変容と、夜の睡眠を含めた生活リズムの改善である。3歳、4歳クラスの幼児は転園してきた子たちがほとんどで、自分で自らの意思と行動を制御できない子どもたちが目立つ。朝から眠そうで、ぼーっとしている、椅子に座ってもダラっとしている。爪先立ってよろよろと歩き転びやすい。そんな子が多かった。怪我もそうしたことの原因とみられた。そこで4月の保育は慎重なスタートにならざるを得なかった。全てが新しい家具や遊具という室内環境でもあり、職員も子どもの行動が予想しにくい状態が続いた。小走りで走ってしまう子ども同士が出会い頭にぶつからないようにしたり、他律の中で生活してきた子どもたちは、「自分で考える」余裕が与えられずに、「指図して行動させられてきた子どもたち」の育ちのアンバランスは目を覆うばかりだった。あまり歩いていないのが明らかで、いわゆる都会っ子、もやしあっ子という感が否めない。

保護者はほとんどが開園前の11月に千代田区役所で開かれた「開園説明会」に参加しており、保育の方針や保育内容を聞いた上で選んでいるので、子ども主体の保育、環境を通

した保育、異年齢児保育などに対しては全く抵抗がなく、そのテーマの要望や苦情は全くなかった。

【園環境】

園舎の目の前は、昭和通りと首都高速道路が走り、玄関を出たすぐの歩道にはガードレールもない。信号のない交差点、傾斜が急で古い歩道橋、秋葉原駅と都営岩本町駅は神田川が遮っているために駅と駅をつなぐ地下通路がない。そこで毎朝夕の通勤ラッシュ時刻は園の前をものすごい数の人が押し寄せる。4月には池袋で高齢者の運転する自家用車が歩道を渡っていた母子をはねて死亡させるという痛ましい事件を皮切りに、立て続けに高齢者の運転事故が続き、保護者にも交通事故を心配する声が多くなった。お迎えにきた親の手を振り切って通りに出てしまう子どももいて、開園直後のメインテーマは、完全に「いかに安全に戸外保育ができるか」「どうやって園庭代替地の佐久間児童遊園まで行くか」ということになった。

こうした不利な保育環境の中で、子どもが園生活や環境に慣れること、一人ひとりの子どもの特性を理解することに主眼をおき、子どもと共に安全な生活を創ることにした。4月16日に初めて近くの公園へ出かけることができた。その後4月24日に万世橋警察署から「交通安全指導」にきてもらい、公園までの散歩コースを丹念に調べ上げる日が続いた。①ガードレールの設置、②交差点の信号設置、③歩道橋の改修の3点を要望する署名を、保護者および法人職員から5月28日より集め、6月13日に千代田区と警察署に対して提出した。その後2本のガードレールが7月25日に設置された。②と③は困難との回答だった。

【保育の進展状況】

4月当初は子ども同士の引っ搔き、子ども自身の転倒による怪我、子ども同士のトラブルによる怪我が発生した。その度に、保護者と話し合いが持たれ、いかに安心・安全な保育を軌道に乗せるかの毎日だった。5月以降はこれといった怪我はぱったりとなくなり、無事に一年がすぎた。年度末に実施した東京都第三者評価の利用者アンケートでは「お子さんがけがをしたり、体調が悪くなったときの、職員の対応は信頼できますか」は、回答者全員が「はい」を選んでいたので、けがや病気の対応への信頼は高かった。ただ「安全対策は十分に取られていると思うか」は82%が「はい」だが、4人が「どちらとも言えない」1人が「いいえ」を選んでおり課題が残る。

食事は「楽しい食事」をモットーに掲げ、黙って食べるのではなく、会話を楽しむ時間として位置付けた。また3つの都知事賞を受賞したコンセプトを踏まえ、保護者支援としての献立表、セミ・バイキングによる意欲的な食事、栽培・調理・共食という人間文化としての食の営みを意識した。子どもクッキングも取り入れた。

都市型の保育園として意識したのは、運動面と同時に、自然との触れ合いや季節感を忘れない生活の充実。そのために、一見少なそうに見えるが、よく目を凝らすと面白い自然

があることに気づくような生活になっていくようにした。例えば、街路樹の下の一畳ほどの地面に、季節の草花を見つけて大切に観察したり、神田川にくる水鳥を見たり、少し自然のある公園で見つけた蝶々やバッタなどを飼育したりと、意外と自然が色々あって楽しかった。ありふれたタンポポの綿毛が種であることを確かめるために、シャーレから芽を出してみたり、みかんの木を植えてみたらアゲハ蝶が飛んできて卵を産んだので、それを大事に育てたりした。また知り合いの園から頂いたザリガニが卵を産んだので、それを育てたりして、その孫が今も育っている。保護者もカブトムシやクワガタを持ってきてくれたりと、子どもたちが喜ぶ昆虫などの提供にも協力してもらった。

令和元年が始まった5月から、やっと戸外活動が活発にできるようになっていった。6月からは3階の運動スペースでのクライミングのほかネットの張り方を見直して(7月12日から)、本格的に体を動かす遊びが毎日できるようになった。この朝の1時間ほどの運動遊びの効果を大きく、身体的な機能の発達は目覚ましく改善した。また後述するが、バスを利用して広い芝生広場やアスレティックフィールド、水族館などに出かけることができた。

7月ごろから戸外にも出られないほどの暑い日が多くなり、「いかに涼しく過ごす習慣を作るか」ということを保育のテーマにした。そのためプール遊びではなく、水遊びの一環としての「水に親しむ遊び」とし、「プールに入れてよかったです」「入れなかつたから残念」ではなく、プールに入ること自体を目的としないよう保護者への説明に力を入れた。暑すぎる日は戸外での遊びもママらならないので、バス遠足は訪問先に「しながわ水族館」を取り入れた。

9月には木場公園や北の丸公園でどんぐり拾いなどで自然に存分に触れて遊ぶことができた。保育参観でもバスを使い、アスレチック遊具で遊び込む子どもたちの様子を遠巻きに参観する「かくれんぼのような保育参観」が好評だった。秋には台風19号で10月12日は閉園となり、神田川や荒川の氾濫や浸水被害が心配されたが、辛くも難を免れた。防災計画に浸水対策を追加してマニュアル化した。

10月から年末にかけては、園医の瀬川記念小児神経学クリニックの星野理事長と相談しながら、保護者に睡眠アンケートをとり、個人面談を重ねて子どもの睡眠の質の追求に力を入れた。4歳以上はお昼寝をしない方向へ向けて、長期的な取り組みを開始した。また千代田区および一般社団法人鬼ごっこ協会と連携して10月の「親子運動遊びの会」を皮切りに、千代田区と相談しながら向う3年計画の「鬼ごっこのある町ちよだプロジェクト」を立ち上げた。朝起きて活動量をあげ、夜は8時30分には布団に入る習慣をつけていく。そのために昼と夜の過ごし方、園と家庭の実のある連携を図った。春に子どもの育ちの課題として掴んだ問題に対して、やっと具体的に解決に向かう活動に結びついてきた。年度末現在、子どもの姿、睡眠アンケート、個人面談によってかなりの改善が図られているという手応えを得ている。生活リズムの改善と運動遊びの充実という2側面から、子どもの経験の質の向上を図った。この実践内容を来年2020年6月の東京都社会福祉協議会での大会で発表することとし、発表原稿(別紙参照)も仕上げたが、新型コロナウイルス蔓延に

よって大会開催が中止になったままである。

年度の後半は、日々の保育に安定と充実感が増していった。お月見の天体観測、姉妹園との交流、芋掘り遠足、ボランティア活動の受け入れなども実施した。

【ゾーン保育】

開園当初から、これまでの姉妹園で実践してきた遊びのゾーンの基本形は全て用意して開始した。1階は0～1歳児、2階は2歳児、3階は3～5歳が主に生活する。それぞれを遊びと睡眠のゾーン大きく分け、2階の専用ダイニングのスペースでは2歳児以上の子どもが昼食と午後のおやつで使うことにした。

遊びのゾーンは基本的には子どもが使いこなす遊びのリソース（資源）として、年齢にあった安全性と一覧性、思わず手にとってみて遊び始めたいと思えるわかりやすさ、静と動のバランスを考慮した生活動線となるようにした。

ベランダと屋上も徐々に整備して、菜園や生き物の観察、テラスからの戸外観察などのゾーンとした。園庭のない保育園でも、「地域そのものを園庭にする」という宣言のもとに始めた活動が保護者から支持され、室内と戸外が連動している活動が感じられるような可視化を目指した。

【バス遠足】

園舎の建つ住所の隣から西側は園庭のない保育園だが、幸い千代田区はそうした園のために公園へ出かけるバスを無料で手配してくれる。5月からは、これを利用して「都立木場公園」までの「バス遠足」を月3回程度実施することにした。また梅雨の時期からは行き先に「しながわ水族館」を加えた。また秋は姉妹園の「せいがの森こども園」（八王子市）や「新宿せいが子ども園」「おとめ山公園」（新宿区）との交流のほか、北の丸公園、上野の国立科学博物館、足立区のギャラクシー、上野動物園などの遠足を楽しんだ。

区の無料バスは午前9時出発から午後3時帰園までの範囲での利用が条件。前月10日までに計画、予約するのがルールなので、それ以外の利用方法は、直接バス会社と契約して実施した。屋形船の利用もこの仕組みの中で活用できたので、今後も神田川と隅田川を利用した保育の可能性を追求したい。ただ、近隣の保育園や幼稚園との交流は、年長児がないこともあり、まだほとんどできなかった。小学校との連携も次年度の課題である。

【主な行事】

・入園セレモニー（4月1日）

2階フロア全体を使って実施。親子家族で参加してもらう。挨拶や職員紹介のほか大型絵本と職員による生演奏、生合唱による「はらぺこあおむし」を披露した。

・親子遠足（5月25日）

親子遠足は、地域を知ること、保護者同士の親睦を図ることをねらいとし、神田川を挟んで保育園の向かい岸にある「佐久間橋児童遊園」をスタート地点として、途中で職員が

出す「地域クイズ」を楽しむチェックポイントを通りながら、ゴールの「和泉公園」までを長短2つのルートを親子で歩いてもらった。神田岩本町は日本の既製服問屋街発祥の地である。地元の連合町会は春と秋の年2回、問屋が衣料品を柳原通りに並べる大規模な神田バザールを開く。またそのバザールの二日間は、「ちよだリバーサイド・プロジェクト」がPR活動として、防災船着場から屋形船を走らせて一般市民が乗船できるイベントもある。そこで親子遠足はその日を選び、バザール事務局とコラボして、親子遠足のルートにその神田バザールが開かれている通りも加えた。ゴールの和泉公園では、弁当を食べた後、職員と親子でじゃんけん列車などのレクリエーションを楽しんだ。

・屋形船納涼会（8月24日）

夏の行事としては、地域との交流を目指したので、千代田区が進めている神田川を交通機関として活用しようと計画している「ちよだリバーサイド・プロジェクト」と連携することになった。同事務局に協力してもらい、保育園の前の防災用船着場（佐久間橋児童遊園）から屋形船に乗って隅田川へ出て北上し東京スカイツリーを見て戻ってくる「屋形船納涼会」を実施した。定員80名の観光用屋形船に親子・家族で乗船、2交代制で、半分の家族は保育園内でスイカ割り、制作遊び、音楽ライブ体験をした。

・夏の水遊び（7月1日～9月6日）

夏のプールは前述の通り、屋上に設けた大型プール（7月8日プール開き9月6日納め）に入ることが目的化しないように、水の多様性を知り、水と親しむことを心がけた。その延長線上にプールの水遊びは選択制（園児数が少ないのでカニとイルカの2選択）とした。屋上で色水遊びをしたり、暑い日は玄関前に打ち水をしたり、ベランダで育てている野菜に水をやったり収穫したり、あるいは金魚やメダカ、ザリガニの水換えなど、色々「水を触って涼を取る」生活を作っていた。

年長児がいないのでお泊まり保育はしなかった。

・いもほり（10月4日）

バス遠足で稻城市の黒川農園まで年中らんらん組で芋掘りに出かけた。

・親子運動遊びの会（運動会）（10月26日）

和泉小学校の体育館（ちよだパークサイドプラザ）を借りて「親子運動遊びの会」（運動会）として開いた。千代田区教育委員会子ども支援課の新井課長と山内係長、和泉こども園小林園長も同席していただいた。内容は鬼ごっこ協会の協力を得て、鬼ごっこチーフ・インストラクターの羽崎貴雄理事に実践参加してもらい、かけっこと親子競技の全種目を「鬼ごっこ」で構成した。かけっこは「通り抜け鬼」の難易度を変えることで0歳から4歳まで種目構成ができ、親子競技は「陣取り系鬼ごっこ」をアレンジした。また相撲の国技館に近い土地柄なので、知り合いの元力士（鎌山部屋）の保育園園長に頼んで若手の力士（若荒輝蓮、葵誠将）の二人招き、実際に四股を踏んだり、取り組みを見せてもらった後で、力士と子どもや親が実際に相撲を取った。競技台などが保育園にないので、個人の発達を見てもらう個人競技ができなかつたことが来年度の課題である。

・お楽しみ会（12月7日）

2階のにこにこ組を舞台に、ダイニングを客席として実施した。ちっち組かららんらん組まで、生活再現遊び、劇遊び、歌と合奏を楽しんだ。事前のアンケートで5月の神田祭で見たお囃子や太鼓を体験したいという保護者からの要望もあったので、神田柳囃子の会に出演を依頼して、幕まで演奏してもらった。また最後にお囃子の太鼓を親子で体験させてもらった。

・成長展（3月25日～27日）

2月29日に予定していた成長展は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために開催できなくなり、3密を避ける形に変えて3月25日から27日の3日間を使って夕方に「ミニ成長展」を開いた。卒園児がいないので卒園式もなかった。

保育参観の他に、一日保育士体験「アロペアレンティング」の体験者も数名あったが、複数の保護者がチーム保育を体験してもらう「チーム保育デイ」実施までには漕ぎ着けなかった。

【季節行事】

子どもの日祭り、七夕祭り、お月見会、クリスマス、お餅つき、節分、ひな祭りなど、日本の伝統行事と子どもが楽しみにしているイベントも大切にした。

【保護者支援】

保護者の子育て支援は、保育園に安心して預けられるということが一番であるので、まずはそれを目指した。園庭のない保育、危険な交通環境、運動不足の解消などに、どのように取り組んでいるかを、その都度、保護者に伝え、解説しながら進めてきた。

4月開園当初のクラス別保護者会（4月3日～9日）、春の保育参観（6月4日～6日）、個人面談（6月～7月）、

7月に実施した開園3ヶ月アンケートによって、保護者が抱いていた当初の心配はなくなり、安心して保育園に通っていることがよくわかった。保護者の子育てを支えるために、最も大切なことは、子どもの育ちへの喜びの共感である。それを共有するために、「信頼と対話」をモットーに掲げながら、保育の可視化を開園前から強く意識して取り込んだ。その手段の一つとして、ホームページによるタイムリーな情報提供を大切にしてきた。各クラスの保育ブログ（保育日記）によって、その日の活動内容、子どもの姿、保育者の思いを綴ってきた。また「園長の日記」は毎日欠かさず続けており、開園前の3月から、その日の出来事や保育の報告、そのねらいや意味を解説し続けている。

また保護者の意向を把握するために開園後3か月、6か月、年度末の年3回の定期アンケートに加え、保育方針の具体化ために個別テーマに絞ったアンケート（地域の祭りへの体験、睡眠の実態調査）を実施した。最後に東京都第三者評価の利用者調査も受審した。（別紙参照）

子どもの育ちを伝える行事には、春の保育参観、個人面談、秋の親子運動遊びの会、保育参観、冬のお楽しみ会、年度末の成長展がある。さらに、希望者には保護者に一日保育

士になってもらい「お母さん先生、お父さん先生」として保育士の体験を「アロペアレンティング体験」と名付けて実施した。

園長と保護者との懇親を深めるための「園長のコーヒータイム」を10月から毎月1回始めた。毎回4～8名ほどの参加があった。園長の子育て情報の提供と保護者同士の語らいの場となっている。

【地域の子育て支援】(別紙参照)

- ・育児相談 入園している保護者とは日々の生活の中で相談を受けている。地域の方からの育児相談はそれだけで電話がきたり来園があつたりということはなかった。秋からの入園見学が始まってから、見学の中で相談を受けることがあった。

- ・乳幼児保育体験 保育園に子どもを預けていない家庭の子育てを支えるために、乳児保育体験を実施した。園児の遊び、授乳、離乳食の様子を見学してもらい、園長や主任が説明した。12家族の参加があった。

- ・小中高生の保育体験 小学生の天体観測や親子運動遊びの会などの行事のほか、平日の夕方に子どもの遊びの相手をする保育体験を実施した。10名の参加があった。

- ・睡眠講座 11月22日のいい夫婦の日から、「赤ちゃんのぐっすり睡眠講座」を毎月1回実施した。場所は園からすぐ近くにある古民家「海老原商店」を使った。

- ・保育実習の受け入れ 東京家政大学4年生1名、白百合女子大学3年生1名

- ・大学生の保育者育成支援事業 大学・短大・専門学校の学生を保育ボランティア体験として受け入れる事業で、桜美林大学から学生が2名保育体験をした。

- ・「鬼ごっこのある町ちよだ」プロジェクト 一般社団法人鬼ごっこ協会と連携して、千代田区を鬼ごっこが盛んな町にする活動を開始。2020年10月から3年計画で広める予定。

【地域との連携】

- ・保護者の自分が住んでいる地域の子ども会や自治会の役員をしている親もいるので、そこから地域の活動予定やお祭りの予定などを聞いて、連携してできることはないか検討しながら進めた。この話し合いの中から、保護者の中から園全体のことを考えてくださる方が出てきてほしいと願っている。

今年度は江戸情緒の残る下町の良さと、最先端の現代アートがクロスしてくる活動の端緒になった。

- ・神田岩本町三丁目町会

保育園が所属する神田岩本町三丁目町会に所属することで、地域への繋がりを深めていった。5月は神田祭が盛大に開かれたが、神輿入に招かれた。

- ・神田須田町二丁目会

園の隣の自治会である「神田須田町二丁目会」とも、9月の町会主催の夕涼み会「スマッシュ2」に寄付するなどの交流を重ねている。

・千代田区和泉橋出張所

和泉橋出張所の石綿所長との連携を密に取りながら、近隣の自治会など地域団体を紹介してもらった。

・ちよだリバーサイド・プロジェクト

大きなパイプができたのは、自治会よりも「ちよだリバーサイド・プロジェクト事務局」とだった。屋形船納涼会が開催できたことは、来年につながると思われる。

・古民家「海老原商店」

柳原通りをアート空間にしたいという夢を持つ海老原商店の海老原さんとも繋がりが深まり、園医を介して出会った永持伸子さんとは睡眠講座を、この古民家を借りて開かせてもらう関係になっている。

・神田柳囃子の会 12月の「お楽しみ会」で本物の「神田囃子」を演奏してもらった。神田柳囃子の会は新幹線ガード下の「ふれあい会館」で毎週、練習をしているので、園長をはじめ職員が事前に「神田柳囃子の会」の練習にも参加してみた。会長はデイリーヤマザキのパン屋さんで、お囃子の後継者が少ないことが課題になっている。

・ダンサー青木尚哉グループワーク

海老原さんを通じて知り合ったアーティスト。2月から毎月、幼児クラスで身体表現活動を始めるに至った。この活動は来年度の運動会につなげる予定である。

・睡眠インストラクター永持伸子

瀬川記念小児神経学クリニックの星野恭子理事長が主催する「子どもの早寝早起きをすすめる会」のシンポジウムで知り合った。11月から月1回のマムズサロン「赤ちゃんのぐっすり睡眠講座」を開いた。

【職員の研修】(別紙参照)

職員の研修は、開園初年度ということもあるので、まずは法人として大切にしてきた保育理念とその方法を再確認しながら、実践に落とし込んで行った。藤森統括園長によるスタートアップ研修に始まり、導入したおもちゃや遊具の特性を理解するために、販売先のキッズ岩城氏による園内研修を開いた。

千代田区が毎年開いている、区内の保育園の視察や、怪我防止のリスク研修などには全て参加した。プール研修、感染予防研修、虐待防止研修など。また環境を通した保育、子ども同士の関わりの中での学び、自発的に子ども自らが動き出す力を信じて見守る保育、そうした目指す子どもの姿と現状とのギャップの原因を理解しながら、見通しを立てて実践した。野外活動で気をつけることも確認できた。

それと同時に、年間を通じて保育環境研究所ギビングツリーが主催するセミナーには全て参加した。キャリアパスと連動した行政主催の「キャリアパス研修」や保育団体や研究会などの外部研修にも参加した。年度の後半は、睡眠に関するもの、アートに関するものも取り組んで行った。

(添付書類)

1. 職員の構成（年度末）
2. 担任表（年度末）
3. 年度途中入退園記録
4. 年間行事結果
5. 研修結果一覧
6. 避難訓練結果
7. 保健総括
8. 食育結果表
9. 地域活動
10. 各種アンケート結果